

大鹿スケッチ

第53号
2015年
3月
〈 発信者 〉
前志満 くみ
〈 提供 〉
旅舎 右馬允

春一番の黄色の花々が咲き始めた庭先では福寿草。山ではマンサク、ゲンゴウバイ。カエデの枝葉が赤くなるのもこの時期ならでは。生まれたての子供のことを「赤ちゃん」というけれど、樹木も同じなんだな、と思う季節がまたやってきた。顔を赤らめて元気いっぱい生まれてくる赤ちゃん。そう、カエデもその時を迎えようとしている。視覚でもだいたい季節の移ろいを感じられるようになってきた。しかし三月はまだ視覚を使って季節を察知するには少し早い。少なくともここ南信州の大鹿村では「寒のもどり」というのがあるからだ。頼りになるのは皮膚感覚と嗅覚。舗装されていない小道をいく。大地がほくほくしている感覚が日に日に強まっていくのだが、時折その柔らかなさが遠ざかる時がある。大地からわき上がってくる白いも春のそれとは異なる時がある。そんな兆しを感じたら体調管理に注意だ。カタチあるものは知恵があり私たちはそれに学ぶけれど、目に見えないものを感じて受け入れていくことも季節の境目にいるときのテーマだと思う。目に見えているものは、結局のところ形のないものから出来上がっているのだから、ないがしろにはできない。

植生調査の季節の前に

「地元の野山、渓谷を歩いて感じたこと学んだこと」

「この斜面を登っていく直径一二、三m程度ですくとナン、ウリハダカエデが」とスマートに伸びる。あるで、それを使いまいか」よってツルものの野菜のエンドウのツルが伸び始めてにしやすい。私の身近にた五月のある日、近所のおじさんやお自然」をどこまで知っているのだろうか。大鹿村無く歩くことにした。二〇一二年志による植生調査の四年目が始まるとうとしている。

田市美術博物館に勤務されていた蛭間啓(ひろま・あきら)さん(学術博士・学芸員)を招いて「オオシカ谷の植物講座」を開催した。彼はこの講座を開催するにあたり村内の植物の調査を数回実施してくれ、それに同行した。調査とくても堅苦しいものではなく、ハイキング気分登山に入る。名前分らない植物たちは片っ端から彼に尋ねてみればいい。「歩く鑑」さながら、彼はすべての疑問にその場で答えてくれた。これまではその辺の「名もなき草や花」たちの世界がぐっと近づいて来てくれるかのようにだった。座学の講座では調査結果も踏まえ、大鹿村の植物の特徴を学術的な視点から伝えてくれた。彼が最後に語った一説が今でも印象に残っている。「自然資源を残してゆく上では、その土地で暮らす人たちがどんなものがあるかを認識しないと資源としての価値もいきてこない」私が憧れていた地元の人々の生き方そのものが答えだった。こうして私の中の「守りたい地元の自然」についての認識が確かなものとなり、目標が定まった。大鹿谷を限るチカラとなるように。住民有るチカラとなるように。住民有るチカラとなるように。住民有るチカラとなるように。住民有るチカラとなるように。

登山者の立場から「リニア新幹線」を考えてみよう！
南アルプスは大丈夫？登山者の立場からリニア新幹線月二〇日に東京モンベル渋谷店五階のイベントスペースで行われます。
(夜七時〜九時まで)

大鹿 HeatBeat

～大鹿の人々～ 第51回
紙谷 正 さん (88)

季節ごとの風景と共に大鹿人の生活をご紹介します。紹介します。淡々とした日々の中に熱く響く「鼓動」をお届けします。



2014年9月小河内沢



冬の寒さが行ったり来たたり、春の日差しが差し込んだり、差し込まなかったり。肌感覚で毎日過ごす三月。大鹿の大地はむくむくとその命を巡らすエネルギーを活発にしています。紙谷さん例の桑畑では毎年この時期恒例の桑の根っここの手入れが行われています。暖かい日には鉄を片手に大地に立つて桑に話しかけます。切った方がい根っこ、生かす根っこ。この時期にちよっと手をかけてやることを繰り返して、もう半世紀くらい命を巡らせている桑たちです。今年も立派なお蚕様を育ててな。